

記録

オーラル・ヒストリーということ

伊藤 隆

日時 平成二四年七月三一日
場所 尚友倶楽部会議室
語り手 伊藤 隆（東京大学名誉教授、広島大学文書館顧問）
聞き手 小池 聖一、石田 雅春
趣旨 広島大学文書館では、これまで地域貢献の一環として、オーラルヒストリー事業に取り組んできました。ただ、事業の実施にあたり、ノウハウの点で戸惑うことが度々ありました。そこで本件について造詣の深い伊藤隆氏にインタビューを行い、技術的な助言を頂くこととしました。

オーラル・ヒストリーの意義について

○伊藤 始めましょうか。
○石田 はい。質問要綱のほうですが、網羅的に作らせていただきます。先生のほうは逆に、どの辺にウエートを置いておられるのかな

と思いでして。

○伊藤 いやいや、僕は君の質問の真意が分からない。僕はたくさん書いているから、それと同じようなことをやって、また同じことを話すのは不愉快だから。

○石田 では、もう少し突っ込んだ質問の仕方にしていこうと思います。

○伊藤 そうそう。では、僕は一番最初に「オーラル・ヒストリーを行う意義として何をお考えでしょうか」というところだけ話しましょう。

もともとは自分の研究のために、『昭和初期政治史研究』を書いた時、この人は生きているから話を聞こうというので、オーラル・ヒストリーというのは要するに取材ですね。そして、「このことについて、どのように行動されましたか」「どのようにやりましたか」とか、「ここにこう書いてありましたが、どうですか」というような質問をすれば、結局は、もう少しさかのぼって向こうは話すし、僕らも話すうちにそうなる。そうすると、かなり範囲が広がるけれども、しか

しある特定の目的のために特定の質問をしていると、こういうものです。それをやっているうちに、同時に木戸日記研究会とか内政史研究会、あれはかなり長期にわたって、その人の生涯を記録するというものでしょう。僕は、日本の文書の残り方を見て、これでは大変であると、日本人の記録が残らないと。

アメリカなどを見ると、すごいでしょう。いろんな人が個人文書もたくさん残して、それが各大学や図書館などに入っている。彼らには彼らの記録のシステムがあるでしょう。秘書がいて、書簡の往復から、面会の記録、電話まで全部記録する。そして、それを分類してファイルしていくと。そのファイルがそのまま、誰々の文書としてどこかに残る。そうすると、すごく系統的に史料が残るわけですね。

そういうことを日本人はしません。黙っているのが一番いいことだという、そのようなメンタリティーの問題もあるのですが。

僕は、やはり日本の歴史史料を残すためには、本当は日本人全部にインタビューをして、その生涯を記録するということをやりたい。しかし、一億何千万人の人間を相手にやるというのは、とてもではない。個人のするところではないし、そういう機関をつくるということ自体をやっても生涯終わると。では、やはり自分のできる範囲でやろうということをやっているわけです。

僕の夢としては、本当はサンプリングをやって、日本人の何十年間の生きざまというふうな記録を作って後世に残したいという希望があったけれども、それは無理なので、結局、自分の研究と多少関係の

あるような人々の記録を残していくと。これは、やはり記録を残すという意味ですね。文書記録が非常に不十分だから、それを補うものとして「オーラル・ヒストリー」と。僕たちは「インタビュー」と言うていたけれども、「談話」ですね。

しかし、急に「オーラル・ヒストリー」だから、何の意味だかよく分からない。御厨（貴）氏が始めたけれども、元はといえば、あれはアメリカでしょう。そして、僕が見たのでは、角田（順）さんが一番早いんですね。『昭和史の天皇』の何回目かに、新聞に書いた。そこに「オーラル・ヒストリー」という言葉を使っていて、非常にびつくりしました。こういうものの言い方があるのかと。しかし、それがいたいという内容を持っているものか分からない。今もよく分からない。僕は「談話」でいいと思っただけです。

そういうことで、とにかく今できることをやろうということ、僕自身はやってきたわけです。この前、小池君も参加して、政策研（政策研究大学院大学）のCOEでかなり大がかりにやっただけです。あれを土台にして、もう少し恒久的なものにしたいと思ったのですが、ぶつつんと切られてしまったから、今度は個人的に科研費を取ったり、今は相手にお金出してもらってインタビューをしているという状態ですね。死ぬまでに少しは貢献できるだろうと、こういうことです。そして、そういう記録を残していくということは有意義だと考えているわけです。

これも少し後のほうとも関わるのですが、活用の問題について、あまり君は質問していないので。

○小池 使い方ですね。

○伊藤 使い方ですよ。これは非常に難しいですね。僕は、内政史研究会の記録を升味準之輔が『日本政党史論』で非常に巧みに使ったと思います。

○小池 長文引用ですね。

○伊藤 ええ。これはうまいなと思ったのです。ぱっと、はまるので、すね。そして人を納得させるものがある。僕はああいう使い方は、ちょっと無理だなと思って。だから、僕自身の論文を見ても、オーラルの引用はほとんどありません。というのは、文書のほうも随分せつとやっているから、文書で足りない部分を補うといつても、話していることが本当かどうか分からないでしょう。それで裏が取れるのだったら、裏のほうを出したほうがいいわけで。

だから結局、その人脈とか事柄の背景とか、その当時はごく当たり前のものだから文字記録として残らない。常識、前提、所与というものを理解していないと史料を読めない。そういうことのために活用すると。そうすると表に出てこない。そういう使い方をずつとってきて、今でもそうですよね。

○小池 先生はずつとそうですよね。

○伊藤 ええ。だから、本当は升味さん流のことを少しうらやましくも思っているのですが。自分でもやってみたくか(笑)。

○小池 時々、笑い話みたいな、うまい引用を。

○伊藤 本当にうまいです。なかなか、あれだけのことはできないですね。あれは升味さんだからできる。ほかに、ああいうことができる

人はいないです。

というわけで、僕はそういうことをオーラル・ヒストリーというか、談話聴取についての意義として考えていると。

それで、今は相澤英之。

○小池 鳥根でしたか、司葉子の旦那ですね。

○伊藤 そうそう、鳥取。広島のご近所です(笑)。それを、この間、三五回ぐらいまでやって、少しこちらもくたびれたし、だいたい聞いていて分かったのですが、課長とかそれ以前のこととは事細かに記憶しているのですが、局長ぐらいになると、例えば「議会であなたはこういう発言をしていますね」と言っても、「あ、そうだった」と。

○一同 ははは(笑)。

○伊藤 「これはどういう意味ですか」と言うと、「どうだったかな」とか言うから、「これは下役が書いた文章を読んでいますね」と言ったら、「そうなんだよな」と。

○一同 ははは(笑)。

○伊藤 ですから、やはり議会の議事録での局長の発言というのは、おおむねその下にいる課長とか、そういう連中が書いている。それを読んで。自分が課長で作っているときは一生懸命にやっています。自分の仕事もやっているし、その表現もやっている。そういうことが分かって、だんだんつまらなくなっています。

○一同 ははは(笑)。

○伊藤 議員になっても、少し最初のほうはいろいろあったのですが、だんだん偉くなって、例えば税制調査会の会長というと、やはり下の

連中が書いたものを読んでいる。だから、これは面白くないし、もうそろそろやめるかよ（笑）。

○石田 三五回は随分と長いですね。

○伊藤 長いですよ。事細かに聞きました。それで今は中断して、三五回分を読んで補充質問をします。それも時間がかかるので、もう九十何歳だし、秋になってからやろうと。夏の間、少しつなぎで「今の消費税の問題を何か深く話してくれませんか」と言うと、「いいよ。しゃべろう」という話だから、それを夏休み中にやろうとしています。これは相澤さん自身がお金を出してくれているのです。

○小池 自分で本を出したいということですか。

○伊藤 というか、富山大学の清家（彰敏）氏と友達で、彼は親中派でしょう。それで彼が中国へ行ったら、「反中派の伊藤隆と一緒にいろいろやっているらしいけれども、そういう付き合いは良くない」とか、いろいろ言われたと。それでも、「まあ構わない」とか言っているのですが、彼が、今、金融庁の長官をやっている畑中（龍太郎）さんのお父さんのインタビューをやってくれと。自叙伝みたいなものを作りたいからと。それで、それをやりました。

この方は、コンサルタントのような商人です。そういうのは今まで聞いたことがないので、少し面白いと思って、「すみませんが、僕はそういうことについて本当に疎いから、あなたにしつこいと思われるかもしれないけれども、少し突っ込んで聞きますからきちんと答えてください。そうしないと一般の人は分かりませんよ」ということで話を、それで本になりました。

そうしたら、今度はそれを見て、畑中さんの奥さんのお父さん、この人は横須賀のさいか屋というデパートのオーナーの弟か何かで、実際、自分もそれに関わっていた人ですが、その人のオーラルをやってくれということ、またそれをやりました。

この人は、デパートなどをやって、かつ海運の問題も少しやっていて非常に面白かったです。海運というよりも倉庫業と言ったほうがいいのかな。いろいろつながっているのですね。そういう仕事のことも聞いて、少し新しい世界が見えたよ。いや、少し見えただけです。

そういうことをしているうちに、畑中さんが「伊藤さん、相澤さんのオーラルをやつてよ」というから、「いいけど、僕はお金はないよ」と言うと、「いいから。相手に出させるから」と彼が交渉して、「分かった。出すよ」と言うのでやっている。かかる費用は、要するに速記代だけでしよう。だから、それはいい速記屋さんを、少し高いけれども頼んでやっている。

そうしたら今度、清家氏のほうが「伊藤さん、これは大蔵だ。通産もやろうよ」と言うので、通産の矢野俊比古という、次官をやっている人もやった人ですが、その人のインタビューを始めた。すると、この人がまた乗り気になって、今は三五回も起こしています。生まれたところから始まって、今はまだ最初の局長か。もうあと一つか二つ局長があつて、次官があるので、そこまで行くこと。もう八六歳、七歳くらいでしょう。彼は、あと二年ぐらい自分は生きるつもりだと。そこまで行くのに二年ぐらいかかる。

○一同 ははは（笑）。

○伊藤 これは、まだ休みなしにやっています。来週もやる。

そういうのをして、もうこれは限界ですね。僕自身も八〇歳ですから、それが終わったらどうしようかなと思っていたら、また清家氏がいろいろと画策して、「伊藤さん、大蔵のあれをやろう」とか「通産の誰をやろう」とか言ってくる。「清家君ね、お金がないのにできるわけがないだろう。ちゃんとそのお金をどこかで調達して下さい。そうしたらやろう」と言っているのですが、そういう状態ですね。

それで僕は、ただもう自分のできる範囲のことしか今はやっていないというわけ。これは現状。それから、その意義は先ほど話したことです。ご質問があれば。

同じことを言わせないように。君はきちんと僕のやつを読んでいるわけだから。

証言者の選定について

○石田 はい、分かりました。そういう先生のオーラルの対象者の選び方に対して、「エリート・オーラル」というような言い方をされる方がいます。そういう意見とか、民俗学のもとのオーラル・ヒストリーというジャンルがあると思うのですが、そちらに対する差とかというのは聞き取りの際に意識的に何かされているのですか。

○伊藤 べつに何も意識していませんが、オーラル・ヒストリー学会というのをつくる時に、あそこに巻き込まれるような感じだったので、僕は断りました。というのは、あの人たちは、ある特定の目的

があつてやっているわけでしょう。

○石田 と言いますと。

○伊藤 ある程度、政治的な。

○小池 庶民というもの。

○伊藤 そうそう。民衆史とか。僕は、そういうことはあまり好きではないので加わりませんでした。たまに、あそこの学会の機関誌みたいなを送ってもらっているけれども、全然なじみはないですね。

○石田 先生は民衆史はお嫌いなのですか。

○伊藤 嫌いというわけではないですが、先ほど言ったように、民衆も含めて全てアトランダムでもいいからやりたいという気はあるのですが、ああいう特定のイデオロギーみたいなものを背景に持つてやるというのは、とてもではないが駄目だ。

○石田 だから、もしも一般の人の聞き取りをするのだったら、無作為に世論調査みたいにサンプリングして、それでオーラルをするというのですか。

○伊藤 そうそう。社会学でやるようなああいう項目を作って、これについてと聞いていくのではなくて、その人と一緒に、要するに自身史を作るような感じでやりたいと、それは思っています。

○石田 ちよつと細かい点になっていくのですが、先生のこれまでのオーラルの取り組みを見ていて、ある段階までは特定の目的ですよね。研究するとかという目的で、特定のことに絞ってインタビューしたのが、ある段階から、いわゆる生まれてから死ぬまで、その方が生きてくる現在までを聞くという生涯型の聞き取りに転換されるのです

が、この転機というのはいつごろですか。

○伊藤 転機というよりも、もともと木戸日記研究会とか内政史研究会というのは、そういう研究会なのですね。あの方式を、ずっと僕は引き継いでいるだけ。

○石田 「内政史研究会」とか読んでいると、途中でぶちっと切れたりとかしているのですが、あれはどういう事情ですか。

○伊藤 ああ。それは僕が関わった限りでは全部聞いているつもりですが、皆さん、例えば役人に聞いて、役人が終わったところでもう終わりとか、そういうやり方をやっているでしょう。

○石田 そうですね。

○伊藤 それはそれで、その人の流儀だからしょうがないなと思つて。

○石田 伊藤先生が一生涯聞こうというのは、どなたかのインタビューを取つて、これはやはり一生聞いたほうがいいなと思ひ始めたことというのはご記憶にはございますか。

○伊藤 特にはないですね。木戸日記研究会で鈴木貞一の話聞いて、これも戦前で終わっていますが、どなたか最近の情勢まで話して下さったということがありました。これはいいと思つていました。

今は、だから相澤さんで、最終回では、あなたは今後の日本についてどういふふうを考えているかということをお話してくれと言つて、「分かった。やります」と言っているから、そこまで行きたいわけですね。自分自身の生き方と同時に、日本の将来というものについて、どういふ意見を持っているかとか。もちろん、その歳になつて自分がこ

れから何かできるということはあまりないと思うけど。

○石田 しかし、相澤さんの場合、三五回ですか。どうしても生涯型になると、お金もかかるし、手間もかかるので、そういうことで伊藤先生自身はしんどいと思われたこととかはないのですか。

○伊藤 それは自分の生活の一部だからね。

○小池 オーラルの長さですね。今、三五回。一人のことをやると、だいたい三五回ぐらい僕らもなるのですが。人にもよりますが(笑)。早く終わらせた人とかも、まあ。

○伊藤 科研費をもらつて、ある程度、資金が限定された時、八回ぐらいで終わりにしようということで、初めから割り切つておいて八回で終わると。相手にも納得してもらつてやる、そういう場合もあります。それでも、やはり最後はきちんと、現在、将来のところまで行く。

それは、どんどん突っ込んでいけば限りないですね。

○石田 どのへんで、そういう線引きとかは引かれるのですか。

○伊藤 お金です。今、矢野さんのほうは、矢野さんの支持者とか、側近というか、その人がどこからかお金を調達してきて渡してくれるからできています。僕は今、もう科研費を申請しても絶対に通らないうし、歳も歳だからね。だから今、自分のお金を投入してやっています。ところは、史料情報のことを中心、そこに重点があるわけです。

今度、『日本歴史』で「近現代史の人物史料情報」というのが、この八月号から連載というか、連載といつても間が空くのですが、三カ月に一遍とか四カ月に一遍、それをずっとやつていくわけでしょう。それで今、ほとんど毎日のようにいろいろなところに手紙書いてお願

いしたり催促したりしている。

聞き取りの態勢づくり

○小池 オーラルというより、今は史料情報のほうが中心ということなですか。

○伊藤 だから、それを補うものとして、やはり必要だと思うのです。

あと、思いついたまま言うと、一人でやるというのは、やはりなかなか大変です。ちょっと考える余裕を得るためには、二人でやったほうがいいと。そして、こちらが少し止まったときには相手ですつと入ってくる。だけど、逆に僕が入ってしまったら、相手が入る余裕がないという事態のほうが多いけどね(笑)。

それから、やはり質問について言えば、ほかの人の質問でこれは駄目だなというのは、自分で説明すること。「この時、こういうことがありまして、こういうお考えだったのでしょうか」「そうだな」「そうだな」は引用できないでしょう(笑)。相手に話させないといけない。どうやって話させるかということを得得してもらわないことにはどうしようもない、あなたの発言は引用できないぞという。

○石田 難しいですね。相手が黙りこくった場合に、やはりどうしても説明的に、こちらも質問を仕向けるケースが出てくると思うのですが。

○伊藤 いや、そんなことはないな。

○小池 そこで我慢ができるか、できないかということですか。

○伊藤 いや、我慢をするよりも、今まで話したことに因縁を付けられないわけだから。「さつき、あなたはこういうふうに言ったけど、どうなんですか。おかしいじゃない」とか(笑)。

○石田 そういうふうにはチームを組んで聞き取りをするというのは、先生はいつごろから始められたのですか。

○伊藤 前の木戸日記や内政史だって、みんなそうだから。

○石田 それはたまたまではなくて、意図的にやったのですか。

○伊藤 もともとそういうやり方でやっていたのです。研究会があって、そこに人を呼んでインタビューをやったから、その研究会のメンバーはインタビューになったということ。でも、自分で企画するとき、だいたい二人か三人ぐらい。君とやった時はそうでしょう。

○小池 はい。三人ですね。四人ですかね。

○伊藤 所澤(潤)君がいたのかな。

○小池 所澤がいました。それから、村上(浩昭)もいました。

○伊藤 あの時、だから文部省の次官。

○小池 はい。次官級ですね。三人。

○伊藤 最後、西田(亀久夫)さんだから、あの方は次官ではないけどね。

○小池 はい。審議官でした。

○伊藤 その後、お金がなくなつたせいもあって続かなかつたのですが、あの後、ほかの人から、この人をやったらどうかという話がありました。しかし、何となくつまらないというか、世代の問題ですが、やはり戦争体験をしているとか、旧制高等学校を経験しているとか、

軍隊を経験しているとか、そういう人たちは少しほかの人と違うのですね。なおかつ、戦争が終わって軍隊から戻ってきて、突然上がなくなっているから、自分が創業者のようなつもりで、がんがん、いろいろやるでしょう。木田（宏）さんみたいに日教組と対決したような人もいます。

そういうのがありますが、そこから後の人たちが、東大の法学部を出て、大蔵省なり何なりに入って、何の失敗もなく昇進していくという、これは聞いて何の意味があるかという、本当にちよつとつまらぬような気がする。

だから総理だつて、海部（俊樹）さんのオーラルはちよつと……だったね。

○石田 「ちよつと」ですか（笑）。

○伊藤 彼はサービスピ精神が豊かだからいろいろ話すのですが、重みがないし、深みがないし、よく聞いてみると竹下（登）の傀儡（かいらい）というような。三木派なのに竹下派なのですね。人がいいから何でも話したけれども、山中湖か何かに、奥さんが病弱だということで竹下さんが別荘を造ってくれたと。仰天して、そうか、そういう付き合いなのかと。金丸（信）が近所だとか言っていた（笑）。

ねえ。驚きました。それは話は面白けれども、これは聞いて後で何の役に立つかわからないような（笑）。せっかく聞くのだったら、もうちよつとまじな人に聞きたいと思って。

○石田 山中湖の話は、テープ起こしに。

○伊藤 いや、きちんと冊子に入っていると思う。

○石田 史料は結局頂いたのですか。キャビネットいっぱいあるとか何とかという話が何度か出てきたと思いますが。

○伊藤 いやいや、あれはもらっていないですよ。

○石田 もらっていないですか。

○伊藤 うん。政策研にいる間に一生懸命に集めて、一番大きなのは宮澤（喜一）さん、それから三重の藤波（孝生）さん。これだけで二〇〇箱近くあったから、ほかのものも全部合わせて、だいたい堀内（寛雄）君なんか「伊藤さん、持ってきた」、（憲政資料室に）四、五年の間に一、〇〇〇箱持ってきた。「整理がとてつかない。置くところもだんだんなくなってきた」なんて言っていた。そちらのほうに全力を費やして。それで、その間に、もちろんオーラルをやっていたよ。タムゲン（田村元）さんの話を聞いたり、面白かったけどね。それから、松野頼三の続きを聞いたり。

○小池 あれは面白かったですね。

○伊藤 松野さんは面白かったですよ。最高でしたよ。あと、宮澤さんの聞いたのですが、これは許諾を取っていないものだから冊子もできないし。

○石田 許諾を取られる前に亡くなられたのですか。

○伊藤 ええ。

○小池 宮澤さんはオーラルの本が出ましたが、あれは言っでは悪いですが出来が悪くて。

○伊藤 そうでしょうか。

○小池 宮澤さんをして、その後、先生は追補なんかも。

○伊藤 そうそう。五、六回やりました。宮澤さんに、「つまらない質問をしますから怒らないでください。その代わり、短い時間でやりますから。あなたも体調が悪いんだから」と言って、三〇分とか一時間とか、そのぐらいやって。でも、面白かったですね。

○石田 どういったことを聞かれたのですか。

○伊藤 彼の支援者の一人であった人の話を聞いて、三信ビルは知っていますか。日比谷の交差点のところ三信ビルというのがあった。今はもう壊してなくなっています。そのオーナーだった人ですが、その人の話を聞いたわけです。

それで、彼の話の中で非常に面白かったのは、「その時だけのお付き合いですか」とお聞きしたら、「ずっとお世話になりました」といわれるので、「『ずっとお世話になりました』ということとは、資金なども出してくれたのですか」と言ったら「そうです」と。いろんな人の話を聞いたけど、資金を出してくれた人のことをはっきり言ったのは彼だけです。重光(葵)と誰の関係だったかな。池田(勇人)か。そのどちらの味方であったのかという話を、いろいろな周辺の人の話や何か、今まで聞いたことのないような話が、とろとろ出てくる。へえと思つて、その後も結構いろいろな話を聞きました。

質問の組み立て方

○伊藤 しかし、僕は話を聞いて、だいたい覚えていないのです。話を聞いて、どんどん忘れていく。話を聞いていて、前の話は、次の質

問に必要な限りでは記憶しているけれども、それ以外のことはほとんど忘れていかないと先へ進めない。それで終わってから、向こうが手を入れたりなんかして、プリントするでしょう。しかし読まない。読んでいる暇がない。次のやつをやっているものだから。

○石田 先生は、そのように聞き取りで質問される際は、前回の内容をもとに質問されるのですか。やはり新聞とかで下調べをして質問されるのですか。

○伊藤 ある程度調べますが、あまり詳しくは調べませんね。だいたい彼の書いたものを読めば、それは彼の頭の中でストーリーとしてできていることだから、それを聞いたならそのとおりに答えるに決まっている。

だから、そういう聞き方をしたら、やはり駄目なわけです。べつな切り口を考えないと。ですから、そこに登場はしていないけれども、確かに彼と関係のあった人物の名前をぽつと出す。「この人とお付き合いがありましたか」「うん、あった」「あ、そうですか。誰の紹介ですか」「へえ」とか言って聞いているわけです(笑)。

○石田 そういう人名をぽつと持つてこられるのは、どこから情報を取られるのですか。やはり聞き取りですか、それとも文献史料ですか。

○伊藤 聞き取りもありますし、文献史料もありますし、いろいろですね。そうすると、そこからどんな話が発展してくるでしょう。それで、話の発展というのは、こちらの持つていき方次第なのです。防衛研究所でオーラル・ヒストリーを始めるというので。

○小池 今、やっていますね。

○伊藤 やっているでしょう。あれを始めるにあたって、僕も、御厨氏も聞かれたのだと思うけれども、どうやってやるのだという話をさせられたわけです。その時に僕は、だいたいの話をして、これは実際にどういうふうにやるということを皆さんに見せますと。そして、研究所長のインタビューをやり、僕が所長について知っていることは、島根県が何かにいたということだけ、そこから始めますよと言うのですね。

それで、島根県にいたのは、自衛官としてどういう役割でいたのですかというような質問から始まって、どんどん広げて質問し、おおむね生涯を聞いた。それは三十分ぐらいでいたい大筋聞いてしまいましたが。そして、みんなに「こういうことなんでしょう」と言っていて、自身は満足して終わったのですが、後で話を聞いたら、「いや、とてもじゃない。オーラル・ヒストリーは難しい」と。

○一同 ははは（笑）。

○石田 拝読してみたいのですが、その時のテープ起こしの原稿とかは残っていないのですか。

○伊藤 残っていない、残っていない。

証言者との信頼関係の構築、許諾の取り方

○石田 よく先生のお話の仕方を「名人芸」と評される方がおられます。やはり聞き方というのは、定式化とか、マニュアル化できないも

のですか。

○伊藤 うん、できない。その時の瞬間的な反応だからね。

○石田 そうすると、こちらとしてはなかなかつらくて、人格の差とか学識の差とか、そういうことに落ち着いてしまうのですが。

○伊藤 やはり相手に対する信頼、相手からどうやって信頼を得るかということ。だから最初に会った時の一瞬は、ものすごく大事ですね。そして、最初に会って、最初に質問するのではなくて、最初にあいさつに行って、少しだけ話をする。そうすると、二回目から始めるわけでしょう。

すると相手が、これはそういうものかなと思うけど、前に会ったということとはすごく違うのです。初めてではない。親近感ができるわけです。それから何回かやっていると、だんだん感情的にも狭まってくる。そうすると、相澤さんみたいに、初めは、こいつは何でそんなこと聞いているんだろな、というような顔をしていたのが、（身体を前のめりにさせながら）だんだんこうなってきた、「もうそろそろ、これで終わりにしたいと思いますが」ということになると、「いや、まだ話すことがある」と。

○石田 引き止めに入るわけですね（笑）。

○伊藤 それで「では、もう一回やりますか」というと、「うん、やるう、やるう」ということになって、二回ぐらいわって。しかし、これはまた聞いても繰り返しも多くなるし、そろそろここで切らないかと思っ、一度強引に終わった。「いったん切りますから。また後で追加してしますから」というので終わらせて。

そういう人間的な信頼関係をつくっていくというのは、いや、つくっていくといっても一回でもできる。それは、どうやってと言われてもね。

○石田 そうですね。やはり一回目にあいさつに行くというのは、何か手土産とか持って雑談をしに行くのですか。

○伊藤 いや。手土産なんか持っていきませんよ。

○石田 どういうスタンスで行かれるのですか。本当に顔合わせですか。

○伊藤 うん。

○石田 だいたい何分ぐらいで終わられるのですか。

○伊藤 「ちょっと打ち合わせのためにいきますから」と行くでしょう。その時に、面白ければ、しばらく話して。

○石田 打ち合わせですか。

○伊藤 打ち合わせ。

○石田 書類か何か持っていられるのですか。

○伊藤 いや、持っていない。場合によって、例えば木田さんをやつて、もう一人、天城(勲)さん。どちらが先だったかな。

○石田 木田さんが先だったと思います。

○伊藤 そうしたら、木田さんのやつたのを少し見せる。こういうふうに行っていますと。だから、前にやつた別のあれでも持っていて、「こんなふうに行っていますが、同じようなやり方でいいでしょうね」と、そういうこと。

○石田 では、許諾書とかを見せるタイミングというのは最初の打ち

合わせですか。

○伊藤 それは最後ですよ。

○石田 全部聞いてから、「どうぞ」という格好にするのですか。

○伊藤 うん。

○石田 最初では提示しないのですか。

○伊藤 だって、もう冊子になったものを見せるわけだから、「これがこうなるな」と思っているから、冊子にするところまでは口頭で許諾を得たようなものです。あなたのを作りますよと。そこから先、音声と赤が入った速記録と冊子になったものを図書館に入れる。最初の速記録と手を入れた速記録は同じだから、赤が入っているだけだから、その赤の入ったものを入れます。これに赤を入れるのは、二回やる人もあるから厄介です。

そして、まとめて図書館で公開する、あるいはインターネットで公開するということの許諾。これは、たしかここ(『オーラル・メソッドによる政策の基礎研究 特別推進研究(COE) 研究成果報告書』政策研究大学院大学、二〇〇五年三月、本編)にあったよね。これではなかったかな。

(付録一の頁を開きながら) うん。これだ。許諾書のモデル。だいたいこれでやりました。これは当時、文化庁著作権課長だった岡本薫さんという人に会いに行つて、この問題の著作権というのはどういふものかを質問したら、いろいろ説明してくれて、「ああ、それで許諾書を作ります」と言ったら、しばらくして「面倒くさいから俺が作つた」と。これがほとんどそうなのです。彼が作ってくれました。これ

をこのまま使おうと(笑)。これには著作権はないだろうと。

○一同 ははは(笑)。

○伊藤 口頭で彼に「これを使わせてもらいますからね」と言うと、「いいよ」と言うから(笑)。

○石田 非常によくできた契約書のモデルだなと思いました。やはり、ある程度かたがまとまったものをお見せした上で、先方に承諾を得るかたがベストなのですか。

○伊藤 それはそうですね。それで、「ほかの人も、みんなこういうふうにやっています。どこまで許諾しますか」ということですね。

○石田 例えば、契約書でいいですよ、裏のほうに公開の年限を好きに書き込んでもらいますね。公開までの年限をそれぞれ決めるでしょう。テープ起こしのテープとか、最終的なものとか。ああいう年限の設定というのは。

○伊藤 年限の設定をしておく。

○石田 はい。この許諾書を書いてから何年後に公開というのを付けますよね。

○伊藤 そうそう。それは、公表用の報告書を作って。

○石田 ここですね。「以降」と、全部空欄にされているのですね。この辺の年限の設定とかは、どういうふう当事者と話し合いをされるのですか。

○伊藤 だから、「すぐ出してもいいですか」と言ったら、やはり利害関係者がいるから、「十年ぐらい置いておいてよ」とか、そういう話し合いをやるわけ。「十年は長過ぎるんじゃないですか」とか、い

ろいろネゴシエーションをやって、「じゃあ、三年ぐらいにするか」とか、そういうので。

○小池 やはり、それは信頼関係をつくってからのほうがやりやすいですよ。

○伊藤 それはそうですね。だから、その冊子を作るところまでは本当に口頭でやっているから、(許諾書に)初めから丸を付けて(笑)。

○石田 なるほど。しかし、政策研でそういう契約書のフォーマットを作る前というのは、どういうふう許諾を取られていたのですか。

○伊藤 全然なしです。たぶん、国会図書館に内政史と木戸研のテープや何かを全部入れましたが、あれは許諾は取っていないはずですよ。公開してはいますが。

○石田 では、国会図書館の憲政資料室が個別のご遺族に交渉したのではなくて、もうそのまま公開しているのですか。

○伊藤 そうそう。音声ではなかったと思いますが。

○石田 だから著作権は、見るのはいいとは思いますが、複写とかになるといろいろと問題は出てきますよね。

○伊藤 そうそう。

○小池 でも、著作権は五〇年かな。

○伊藤 そうそう。

○石田 亡くなってからですからね。そうすると、(著作権が)まだ随分と生きているのが多いのではないかと思います。

○伊藤 そうですね。この許諾の問題になつてくるとなかなか厄介だし、僕はやりましたが御厨氏はやらないとか。そういうのがあって、

あの時やった全てについての許諾がないのですね。

○石田 あの史料の幾つか。

○伊藤 ええ。僕のやったやつは大体ありますよ。だから今、随分ネットですち上げしていますが。

それで、この間、椎名文書をもらうことになったから、椎名素夫さんとという人の遺族に会って、その時にいろいろな交渉をしました。椎名悦三郎文書の非公開分を公開にするとか、今まで寄託だったものを寄贈にするとか、また、椎名素夫さんのものをもらうとか。これも寄託ではなくて寄贈にしてくださいと。後々面倒ですから。それから、その政策研の時にインタビューしたのをオープンにできるように契約をしてくださいとか、全部頼んだよ。

僕は、それは憲政に頼まれてやっているわけではなくて、自発的にやっていて、結果を憲政にと。

○石田 しかし、先生はなぜ政策研の段階で、こういう許諾書の契約書を作ろうと思立たれたのですか。

○伊藤 それまで全然やっていなかったのですが、これは大学の公的な事業としてやって、しかもインタビューを始めてから契約までというのを初めからうたっているわけだから、契約書を作らなければならぬ。

御厨氏が契約書を作るとか何とか、いろいろがちゃがちゃやっていただけでも、結局できないわけですよ。ああだこうだ、いろいろあれして。それで僕が岡本さんに頼んで作ってもらって、これをどんどん使ったので(笑)。

○石田 しかし、全国的に見ても、まだまだ契約書というのは全然普及していないですよ。

○伊藤 日本社会はあまり契約書の社会ではないですからね。だいたいい口頭で、ということも少なからずあるわけですよ。

○石田 そうすると、トラバルのものになったりすると思うのですね。

○伊藤 ならない。

○石田 ならないですか。

○伊藤 今まで、史料の問題でトラバルになったのはあまりないですよ。オーラルでもそうですが。

○石田 プライバシーの問題などで、けちを付けられたりということはないですか。

○伊藤 いや、そんなのはないですね。

○石田 「わしのことを悪く書かれている」とか言って。

○伊藤 ええ、全然。そういうことを言うてくる人があつたら、「いや、あなた、悪口を言われるぐらいがいいほうだと思ってください」と。「沈香もたかず屁もひらず」という人生では面白くもおかしくないでしょう」と。「歴史というのは何百年という単位で人の評価をしたりするので、今は悪口を言われたって、それが何十年後かどうなるか分からないのですから」と、何とでも説得します。

○一同 ははは(笑)。

○石田 そうですか。先生だから言える一言かもしれないと思わないこともないですが。

○伊藤 いやいや。

証言者の選択

○石田 しかし、オーラルなどでいろいろな方からお話を聞くとと思うのですが、先ほどの話に少し戻りますが、相手との信頼関係が大切だとおっしゃいました。やはり第一印象で嫌だと思われる人もいますよね。先生も人の子ですから、こいつの話は聞きたくないとか、そういうのはないのですか。

○伊藤 いや、そんなことはない。

○石田 逆に人を選定する段階で、ちよつとというふうに遠ざけることはないのですか。

○伊藤 ない。人を選ばず。

○石田 人を選ばず。

○伊藤 ただ気持ちとして、先ほど言ったみたいに、過不足なしに生きてきた人は、あまり聞きたいとは思わないというだけのことだ。

○石田 ああ、そうですね。過不足なくですか。

○小池 聞いているうちに、つまらなくなることがありますね。先生がおっしゃったように、やはり戦争体験というのは相当大きいですね。

○伊藤 大きいですね。やはり平穏な時期になって官僚化が進行すると、人間の劣化が起こります。今、人間の劣化もピークでしょう。

○小池 間違いない。

○伊藤 あの総理大臣を見れば分かりますよね。

○小池 そういうお話を聞いている途中で、先生は、先ほど官僚さんのお話をされましたが、やはりあまり聞きたくないというのは、当

然、今までもあったわけですよ。

○伊藤 いや、聞きたくないのではなくて。

○小池 面白くないと。

○伊藤 ですから、先ほどの話は、ある意味では面白かったのです。やっぱりそういうものかと。三木派といつても、結局のところ、竹下さんに助けてもらわなくては総理になれない。だから言ってみれば、あれも僥倖（ぎょうこう）でしょう。

だから僕は海部さんに、「やっぱり竹下派の援護がないと政権運営はできませんね」と言ったら、「そうなんです」と。そのように言われてしまうと継ぎ穂がないではないですか。「そうですね」と言うよりしかたがありません。

私は前に『茨城県議会史』の経験があつて、この時も私が提案してオーラルをやったわけです。だいたい実力があるのは自民党の連中で、それを聞いていると、社会党も聞いてくれということで社会党にも聞きました。その人たちに、「日本社会党と言われているけれども、日本社会党という評判もありますね」と言ったら、「そうなんですよ」と。会社の候補なのです。そのうち何人かは社会党に割り振って、何人かは自民党に割り振るということで、「それは会社党と言われている方がないですね」と言うので、それは発見ではありますが、それだけストレートに言われたら継ぎ穂がないというか何というか。

そういう点では、岸（信介）さんのインタビューでは、こちらが聞きにくい話を遠回しに聞くと、向こうもそれを分かっている、ストレートに答えない。しばらくたって、そこはかとなく答えているわけです。

やはり、そういうやり取りの面白さというか、それを楽しめる人が最高だと私は思っています。ですから、確かに事実を聞くことも非常に大事ですが、それを遊べるということ。それは岸さんなんて遊べる。

○石田 それは、どちらが手玉に取られていたか分からないですね。

○伊藤 そうです。

○小池 あれは戦いというか、すごく知的な感じがしますね。

○伊藤 ええ。ある意味では戦いですが、戦いがいないのは、やはりつまらないのです。

○石田 先生は、ご意見拝聴的なものは苦手ですか。

○伊藤 ご意見拝聴などしないもの。

○一同 ははは(笑)。

○石田 いや、自分の思いの丈を一方的に話す方もおられるでしょう。そういう場合は。

○伊藤 いや、そういうことはないですね。どんどん質問していますから(笑)。

○石田 しかし、今まで先生がインタビューをされてきて、質問しにくいと思われた相手も何人かはおられるのではないですか。

○伊藤 いやいや。

○石田 今の岸さんも質問しにくかった部類ではないですか。

○伊藤 いやいや、十分に楽しくやりました。

○石田 後藤田(正晴)さんとかはいかがでしたか。

○伊藤 後藤田さんです。時々困ったような顔をして、「いやあ、何と答えたらいいかな」とか言いながら(笑)。

○一同 ははは(笑)。

証言者とのやりとりの妙味

○石田 御厨さんの書かれた『オーラル・ヒストリー』(中公新書、二〇〇二年)では、例えば、人のオーラルをする際に、他人の証言を引用したりしては絶対にいけないというように書かれています。そのへんはどう思われますか。

○伊藤 いやいや、そんなことはないです。

○石田 そういうことをしたら、逆に向こうが話さなくなってしまったと書かれていましたが。

○伊藤 いやいや。

○石田 そういふのは引き合いに出しても大丈夫ですか。

○伊藤 大丈夫。

○石田 「あの人はこう言っていますが、先生はどうですか」というような言い方というのは。

○伊藤 ええ。

○小池 でも、それは先生だからできるというか、名人芸みたいなところが確かにあるような気がします。最初からそういうことができたわけではなくて、かといって、下手にやると、最初から尋問聴取みたいな質問表をつくってというのも多いし。だから、史料のそういう話は、先生は話の中で出されるから証言として取れるような気が非常にするのですが。

○伊藤 ええ。だから、なるべく質問要綱は固有名詞やそういうもので作っています。

○小池 固有名詞を入れるということですね。

○石田 人名ですか。

○伊藤 そうそう、人名とか。あまりいろいろ書かないのですよ。場合によっては作らないです。

○石田 作らなくても何とかなるものですか。

○伊藤 ええ。だから、あなたが「今日は何とかの時代についてお話を伺います。入り口として、こんなことはどうでしょうか」と聞いてみる。そうすると、自動的に話が広がってきますよ。転がっていくとか。それを追いかけていくのです。そして、だいたいこのように着地するだろうなと思っていいたら、(右上に手をあげながら)こちらへ行ってしまった。これには、ついていきます。(左下に手を下げながら)そして最後はここに持ってくる。

でも、この想定外の話というのが一番面白いわけです。こちらが想像をしているのは、彼の書いたものなどをいろいろ読んだ余計な情報です。それをぶち破ってくれるのであれば、それに越したことはない。こちらが壊さなくてはならない場合がありますね。それは、やはり価値観の問題です。

○石田 価値観ですか。それは右とか左ですか。

○伊藤 いやいや、右とか左でも僕は一向に構わない。右も左もやっていますからね。

僕は書いていますが、人間というのは自分というもののイメージを、

いつもつくって生きているわけです。それで戦争が終わって、それまでいいと思っていたことが全部悪いことになった。その時にどうやって自分のこれまでを新しい価値の中で合理化していくかというふうにして生きていくわけです。それでないと、本当に精神病になる。

だから、彼が戦前のことを語っているときに、それは後からデフォルメされていることがあるのです。それは話を聞いていて、ある程度分かります。それをどうやってその当時の元に戻すか、ここに工夫が必要なわけです。ということは、つまり戦前の時期にあなたがやったことは大変結構な意義あることだということを暗に示して、向こうが話すことができるような雰囲気をつくらなくては駄目です。

ほかの人のインタビューを見ていて、これは若い学者に対して、質問をされている人がサービスをしている、迎合していると思うところがあります。そうでなくても今の価値に自分を置き換えているわけですから、それをいかにして払拭して、戦前的な、その当時の考えで何をどうやったかということを思い出していただかないとまずいわけです。そうでなければ、彼のつくったストーリーを聞くことになる。それが戦争なのです。これが一番難しいですね。

しかし、戦後の人はその転換がありません。だから、言ってみれば平板なのです。深みがないというか。それが先ほどの問題とも少しつながっていますね。

○石田 話がわき道にそれるかもしれませんが、若い人が聞くと相手がサービスで語っているとおっしゃったのですが、それはどういうものを讀まれて感じますか。証言とかで。よく分からないような、分

かったような感じがするのですが。

○伊藤 会話をしている時に、相手が何を望んでいるだろうかということは見えるわけです。質問によっても。

○小池 どういう答えを期待しているか。

○伊藤 そうそう。

○石田 予定調和的なやり取りになっているということですか。

○伊藤 そうそう。それになると非常にまずいわけです。だから、こちらからそういうことを期待しているわけではありませんというメッセージを、いろいろな場面場面で送っておかないといけないわけです。

向こうだって面倒くさいでしょう。戦前のある時期のことを、自分を正当化して話すというのは非常に難しい。だから、どうしても安易に相手がこういう返答をするだろうと期待しているものに答えようと。それだと面倒くさくはないですね。彼にとって、べつに得にも損にもならない話ですから。

○石田 やはり一回限りのインタビューでは、その壁を破るのは難しいですか。

○伊藤 難しいと思いますね。やれないことはないと思いますが、ある程度、深みにはまらないと大変困難ではありますね。

○石田 深みというのは、相手との信頼関係ですか。

○伊藤 そうです。結局、相手のつくっている自分物語に踏み込むわけですから。それは相手の人格の中なのです。だから戦争です。しかもそれは、相手の場合によっては怒らせてもしょうがないのですが、なるべくスムーズにやりたいわけです。ですから、いろいろなメッセージ

ジを送っておいて誘導するといいますか。

○石田 ただ、その深みにはまると抜け出せなくなる恐れも一面ではあるのではないかと思います。

○伊藤 ええ。だから、抜け出せないようにするから三十何回もなってしまうのです。

○一同 ははは(笑)。

○伊藤 でも、これは向こうがお金を出してくれているから、何回になろうと一向に構わない。

○一同 ははは(笑)。

○石田 そうですね。八回分しか金がないのに、三十何回やったらつらいですからね。

しかし、先生は相手と価値観を共有するために、ある程度サービス精神を発揮した質問などはされないのですか。

○伊藤 そうですね、しないです。

○石田 あと、遠回しに聞いても、相手がここはどうしても聞いてほしくないなど避けるような答えをしていくではないですか。そういう場合には、ずばつと踏み込むのですか。

○伊藤 いいえ。

○石田 そのままで泳がせるのですか。

○伊藤 いや。

○小池 手を替え品を替え。

○伊藤 そうですね。今言ったのは本当にそうです。手を替え品を替え、話している間に入り込む隙間というのが、やはりあるのです。

○石田 隙間ですか。

○伊藤 ええ、隙間。その時にびゅっと入っていくとか。

○石田 それはなかなか気の利いた受け答えになりますよね。相手がすっと隙を見せた瞬間に踏み込んでいかないといけないので。

○伊藤 そうです。でも、面白いですよ。お話をしているときに、ちよっとおかしいなと思って、やはりその当時付き合っていたであろう人名を出すのです。そうすると、「ああ、あれは懐かしい」と言うでしょう。「どんなことで付き合っていましたか」というような話になつてくると、局面が変わる。そして、その当時のことを思い出すわけです。これは自分の物語の中に入っていないからです。そうすると、そこから抜け出すことができる。

だから、非常に硬い物語をつくっている人は、なかなか殻を破るのは難しいのですが、ナベツネ（渡邊恒雄）さんだって、「伊藤さんたちには何かいろいろ質問されて、答えたくないことまで、つい答えさせられて」。

○一同 ははは（笑）。

○伊藤 「でも、まあ良かったと思うよ」と。自分で自信を書いていたら、もう少し違うものになっていった。このほうが正直になったのだという言い方をしていたから、それはそうかもしれないと思って。それでも、随分隠しているわけですね、当然のことですが。もつと「悪い」ことをしているに決まっている。

○一同 ははは（笑）。

○石田 当時、その人が書いた文章を目の前に突き出して「どうです

か」と聞いたら、角は立ちませんか。

○伊藤 そんなもの、立ちませんよ。

○石田 逆に、その当時書いた文章に引きずられて証言も変わっていくということはないですか。ちよっと仮定の話ばかりして、お答えにくくて申し訳ないのですが。

○伊藤 それは、その当時書いた文章をよく使いますよ。「ここに書いていらっしやいます。この当時、書けなかったこともあるのではないですか」と。

○石田 なるほど。

○伊藤 いろいろな切り口があるでしょう。「この中に出てくる、このメッセージは、当時としてはどうだったのですか」とか、「反響はどうでしたか」とか、いろいろ聞き方はあるでしょう。「もしかして、本当に自分が書いたのですか」とか（笑）。

○一同 ははは（笑）。

○伊藤 よくあるのですよ。名前を貸している。みんな、ごく当たり前にやっているわけです。最近、佐藤卓己さんが、何だったか、『実業之日本』の主筆者を描いています。あれはものすごく面白い本（『天下無双のメディア人間―喧嘩ジャーナリスト・野依秀市』新潮社、平成二四年四月）で、これは読み始めると止まらないから、時々一〇ページぐらいずつにして読みました。

○石田 片山潜とかに文章を書かせるという話ですね。

○伊藤 そうそう。ああいう文章というのは、名前と一致しないことがあるのです。だから、それはやはり聞く。それから、「ペンネーム

で書いていませんか」と。

○石田 そうしますと、逆に言うと、文献史料も必ずしも信頼性が高くないという話になりかねませんね。

○伊藤 もちろん、そうです。

記録の取り方、残し方

○石田 オーラルをしていると、今日の場合はビデオカメラを入れさせていただいています。表情とか話の間の置き方とか、ああいうのがなかなかテープ起こしの時にできないですね。

○伊藤 そうそう。前から御厨氏が映像も一緒にとろうという話があったのですが、そもそも最初のころはテープレコーダーが大きかったから、それを目の前に置くと話さない人もいるわけです。しかし、だんだんレコーダーが小さくなって、(両手で一五センチ四方の四角をつくりながら)このぐらいになったときには、自分の孫もそれを持っていて音楽を聞いたりしているのです、日常普段のことだから、黙って置いても文句が出ない。

しかし映像になると、今はこんな感じでもできるけれども、昔はもつと大きなものでしたから物々しいわけです。そうすると、すごく気にしてしまつて、それはやはり難しいというのでやめましたね。

○石田 そうですね。このビデオカメラも映像はいいのですが、距離が離れると、市販のものは音を拾うのが弱いのですね。ですから、たぶんこの距離だと、集音マイクを使って先生の声がぎりぎりに入るぐ

らいで、もつと声の弱い方とか距離が離れていると拾いきれないことが出てくるのですね。やはりきちんと撮ろうと思うと、プロ仕様の大きなカメラを入れたいですね。

○伊藤 そうそう。あれは圧迫感があるみたいです。

○小池 そうでしょうね。

○伊藤 だから話してくれない。そもそもテープにとつてはいけないというのもありましたから。嶋田繁太郎氏などは、絶対にテープは嫌と。だからメモを作ってしまったが、メモでは駄目。自分自身にも信頼性がない。

僕らはテープに入っていると思うから、何を聞いたかなんていうことは関わりなしに先へ進めるでしょう。そういう安心感があります。新聞社の取材も、結局オーラルでしょう。新聞記者はメモをとったりテープにとつていて、後でテープにとつたものを聞いて記事にする。ですから、これは残らないわけです。だから、速記者というものが生まれてから、音声を記録することができるようになったわけです。

僕らが最初にやっていたころは、テープではなくて、速記者が速記をやっていました。速記の独特の文字があるでしょう。あれでやっていたのですね。だから音声は残らない。ある段階から今度はテープレコーダーで音声をとる。ところが、テープは高いから、音声は速記をつくるためのものであつて、速記ができれば音声は上書きしてしまふ。音声は記録として残らないというのが、ある段階まではそうでした。

だから、その段階によって記録の媒体が違つたり、記録の仕方が変

わってくるのですね。それは保存や公開にあたって非常に面倒なことです。そしてテープも劣化します。カセットテープになる前のオープンリールはテープが厚いのですね。だから、このテープとこの下にあるテープとの間に距離があって混線することはない。ところが、カセットテープになった時、テープが薄いので、保存状態が悪いと上と下が混線するのですね。

それともう一つは、留めがはずれてしまう。『昭和史の天皇』もテープをもらった時に、これは二段階あったのですが、読売新聞社からもらったものと、松崎昭一氏が持っていたものをもらった。それで武田（知己）君が整理して、結局、最終的には憲政（資料室）に入れてもらったのですね。これも許諾の問題がどうなっているのか、ちよっと聞いてみないと分からないけれども。

ですから、いろいろな問題があつて、憲政でも公開の問題について、もちろん許諾の問題から始まって、前にやったものですから連絡先も分からないというのがたくさんあるでしょう。それから、音声をはかに移すといっても、テープが壊れていけば、修理しなくてはならない。どこで修理するのか分からない。また、いろいろな記録媒体があつて、MO（光磁気ディスク）というのは音声を入れられたのかな。

○小池 昔は入れられましたね。

○伊藤 そうですね。そうすると、MOは今デッキがないのですね。MOはフロッピーディスクの少し分厚いもの。僕もMOに記録したものがありません。だけど、MOのディスクデッキがないから、今は読むことができない。外付けのディスクをどこかで売っているのかどうか

分からないけれども。

それで昨日だったか、おとといだったか、ここ（尚友倶楽部）でMOなんていろいろ話していたら、「ここにあります」と、入ったところの受付の女性の脇にMOのデッキの入り口があるのです。「じゃあ、今度持ってくるからお願いな」と言つて、それで引き出して、USB（フラッシュメモリー）か何かに入れてしまえばいいでしょう。あのUSBというのでもいいような悪いような、落とすのですね。小さいから、どこに行つたか分からない。

だから、媒体をどうするか、そして、デジタルにして本当にそれでもつかという問題もあるわけです。あれも劣化しますから。ですから、最終的にどうするかというのは、まだ課題ですね。永久不滅ということとはあり得ないですから。そうすると、逆に言えば、字にしておいたほうが安全という面も出てくるわけです。でも、字にすると、ニュアンスが分からない。「ええ」と言つたときに、それが肯定的な「ええ」なのか、否定的な「ええ」なのか、曖昧な「ええ」なのか分からない。

○石田 そうですね。沈黙の間とかも大事ですね。

○伊藤 だから、丹羽（清隆）さんという有能な人がいたでしょう。あの人はもう亡くなつてしまったから非常に今困っているわけです。彼の仲間に今頼んでいるのですが、丹羽さんという人は、その間までとつてくれていたからね。

○小池 読んでいて間があるのですね。

○石田 「・・・」ですよ。

○伊藤 あの人は名人芸で、彼ががんになって、しばらく克服して生きながらえて、最後に「伊藤さんのインタビューの記録をやりたい」と。それで間に合わなかったから。

ああいう人材は、ただ単に音声を忠実に拾うというのではなくて、例えば、人名や固有名詞というのは勉強しないと分からないでしょう。それをきちんとやっていた。だから、すごく学識があつて、調査のシステムを自分なりに構築していました。そういう人がある程度たくさんいないとどうしようもないし、そういう人を継続的に活用していくためには、お金も必要なのです。少し高いお金を払っても、そういう人に頼んだほうが後の手間がない。

○小池 ほとんど手を入れることがないです。

○伊藤 ない。たまにあると、「ああ、見つけた」というようなものです。

○石田 やはり間違いを見つけるとうれいしいのですか。

○伊藤 うん。自分の間違いは癪(しゃく)に障るけど、人の間違いは面白い。ああ、こんな簡単なミスをやっているよとか(笑)。

オーラル・ヒストリーと史料収集

○小池 その意味では、今、特にオーラルばやりではないですか。先生がされていたオーラルのやり方とか、御厨さんのやり方とかがあるとは僕は思っているのですが、オーラルばやりですね。でも、その半面、オーラルをやればやるほど、史料情報が非常になくなってきてい

ると言われます。オーラルで済ませてしまうというイメージがすごくあるような気がして。

○伊藤 それはないと思いますね。僕はオーラルをやることで史料を得たのが、ものすごく多いわけでしょう。だから、オーラルは史料への入り口だという側面もあつて、先ほど、意義の時に言わなかったのですが、ちよつと手段にしてしまっているところがあるのですね。

○小池 史料を引き出すためのですね。よく先生がおっしゃるのは、お話の中で「これは日記をもとにして話されているのですか」とか言われる時がありますね。それで史料があることを確認してというようなやり方をされますから。

○石田 一番最初の意義のところの話が返ると思うのですが、伊藤先生ご自身は、最初のころは明らかに手段としてのオーラル・ヒストリーや聞き取りだったと思うのですね。

○伊藤 いや、そうでもないですね。时期的に言えば、木戸日記とか内政史に参加したのと、自分が研究を始めたのは、それほど変わらないわけです。

○石田 そうですか。

○伊藤 ええ。もつと古く言えば、林茂先生に言われて『日本終戦史』をやった時に、担当の読売の記者塩田丸男氏、彼に連れられていったインタビューをやっていたのです。樺太で引き揚げるといった時の状況はどうであったかとか、それはいろいろな人に聞きました。それで、やはりこういうことができるのだと思つた。

だから、自分が昭和史を始める時に、初めは林さんが「昭和史なん

ていうのは史料がないからやっつては駄目」と言われたので、僕は「いや、ないんだったら自分で探します」と。それで、生きている人はインタビュー、死んだ人は遺族から史料をもらおうというのでやっつたでしょう。そこからスタートしているわけです。

だけど、同じ時期に内政史とか木戸日記研究会をやっているわけです。そして、先ほど言ったように、塩田さんに教えられているいろいろやっつたという経験もあって、いろいろミックスして、では、というのでインタビューをしたということです。

当初はなかなかうまくいかないインタビューもありました。慣れていないですし、突然行つてというか、もちろん手紙は書いて了解を取って行きますが、やはり話の仕方が問題なのでしょうか。

○石田 先生が書かれていた太田耕造さんの時は、やはり散々な目に遭ったのですか。一行か二行で、さらっと失敗したと書かれていますか。

○伊藤 そうそう。彼は『西園寺公と政局』に、こういうふうにならば（驥一郎）のことが書かれていますか、どう思いますか」という質問したら、「おまえは『西園寺公と政局』なんか使っているのか」と。「ええ、使っています」と言ったら、それでも駄目。それで、私はすぐに追い出されたと思ったのですが、彼の日記を見たら、東大の伊藤隆というのがやってきて、いろいろ質問をしたと。「二時間も粘って帰るなんて（笑）」。

○一同 ははは（笑）。

○伊藤 そうか、粘っていたのかなと（笑）。

○石田 太田さん以降、史料に基づいて聞くことは、あまりされなくなったのですか。

○伊藤 いやいや、そんなことはないです。

○石田 「日記にこう書かれていますか」というのは、やはり普通に聞かれる方法ですか。

○伊藤 それは方法です。一番あれだったのが、矢次（一夫）ですね。矢次にいろいろ質問をして、一応話のですが、にこりともしないおっさんですから、よし、それではけんかをしよう。

それで、彼がいろいろ言ったことについて、「大蔵公望という人は、あなたが本当に信頼している人ですね」と言うと、「そうなんだよ、あれはいい男でね、絶対的な信頼を置いている。随分助けてもらった」と。「あの人の日記にこう書いてあります。今のあなたのお話と全然違うんですが、どう思いますか」と言ったら、彼は烈火のごとく怒って、「おまえみたいな机上の学問でやっている学者とは違う。俺は実際にやっているんだ」と。「でも、あなたはさっき信頼できる男だと言ったでしょう。その人がこう書いていますよ。これをどう思いますか」と詰めたわけです。それで彼が怒ってしまった。

だけど、だからやめることにはなりません。そして、彼は後で訂正を少しはして、それで話が先にいって、今度はだんだん笑うようになってきて、話がスムーズになった。やはり、けんかするということのも一つの方法ですね。ばんとぶつかるといふのも。

○石田 私は臆病な人間だから、そういうのは避けたいと思うのですが、けんかをしてまでも証言を取ったほうがいいという判断は、どの

へんでされるのですか。

○伊藤 それはその時の成り行きです。それで彼は、伊藤という男はなかなか骨のある男だと思ったのでしょうか。そして、岸さんの時に、彼はインタビューとして僕を呼んだわけです。

○小池 なるほど。

文字資料とオーラル・ヒストリーの関係

○石田 オーラルと文献史料だったら、文献史料のほうが価値があつて、オーラルのほうは二次的だという見方もありますね。

○伊藤 知らない。僕は対等だと思いますが、文献史料の裏を取るために、やはりオーラルが必要ですね。

○石田 中世や近世のように文献史料のみでは、やはり難しいところが近・現代史では多いのでしょうか。

○伊藤 どの時代でもそうでしょうけれども、新しいところだったら、それができるといふことですよ。日記などは、かなり信憑性があると思いますが、時々あるのは、誰かと誰かが会って話をして、両方が日記に書いているが内容が違ふと。要するに、この人がこちらの人に会って関心を持ったことと、こちらの人がこちらに会って関心を持ったことは違ふのですね。それはしようがないですね。

やはり歴史学の史料批判というのとはそういうことではないですか。それはオーラルだって同じことですね。言っていることが違ふのですから。同じ事柄について話していても、全然違ふでしょう。だから人

間社会だと言うのです。

○石田 私などは公文書を見る機会のほうが多いのですが、公文書を見てみると、だいたい皆さん話が決まってから判子をつけて起案をするから、全然情報がないですよ。抜け殻というか、だし殻みたいな格好なので。

先生は公文書、私文書、オーラルという分類からいうと、どのへんにウエイトを置かれますか。

○伊藤 やはり私文書ですね。公文書は、あちこちの調整が済んで、どこにも角が立たないようにできているわけですから。だから実際問題、公文書で物事が動いていくというような理解は僕はしていません。公文書には、やはりいろいろな人の意見がくつついたままでいっているわけですから、実際に運用される場所では、また違ふわけです。

○小池 今の公文書は過程が残りませんからね。

○伊藤 ええ。それはアメリカの文書では残るのです。議事録が全部残りますから。今度の三・一一の場合のいろいろな議事、あれは議事録がないとかいろいろ言っていますが、僕は絶対に議事録がないなどということはあり得ないと。役人は必ず作ります。

○石田 そうですね。まず録音がないということがないですから。絶対に誰かがICレコーダーを持ち込んでいますからね。

○伊藤 ええ、今はね。前はみんなメモを作っていますよ。だから、徹底的に探せば議事録は絶対にあるはずですね。議事要旨でも。それをみんなに配ったかどうかは別として、担当の課長にくつついている

記録係が必ずいますから。だけど、それを残さないでしょう。だから、課長が動いてしまえば、もうそれでおしまい。その課には記録としては残らない。

○石田　そして私文書として、その記録は残るといふかたちですか。

○伊藤　残る場合もあるし、あとはだいたい捨てる。だから、公文書の保存とか何とかというよりも先に、公文書をいかに作るかというほうが大事ですね。それをきちんと決めておくと。問題提起から始まって議事録を作って、結論まで全部ワンセットで残せと。

○石田　しかし、明治以来、百四〇年ぐらいかけて、残さないシステムが逆に日本はできているので、打破するのは難しいのではないのでしょうか。

○伊藤　いや、だけど明治期は史料がいっぱい残っています。だんだん減っていくのです。

○小池　戦後ではないですかね。

○伊藤　戦前もだんだん少なくなっていくのです。戦後になって、もっと少なくなってくる。戦後は、戦前の史料を燃やしたでしょう。あれもやはりトラウマみたいな感じで、みんな捨てるのが平気になってしまったのですね。都合の悪いものは捨ててよろしいという前例をつくったわけでしょう。明治期は、みんな自分たちが新しい国家の形成をやっているのだという自負があった。だから記録を残したのです。議事録も随分残っていますし。

○石田　そういう意識はあるかもしれませんがね。やはり戦後すぐの改革の時は、皆さん非常に私文書も公文書もよく残っていると思うので

すね。

○伊藤　そうですね。あまり残っていないのではないですか。

○石田　そうですね。その後、だんだん減っていくという印象を私は持っていたのですが。

○伊藤　公文書だって、昭和二〇年代はあまり残っていないでしょう。だって、こんなのを作っても面白くない。全部アメリカにチェックされる文書ですよ。ほとんど意味がない。

アメリカとのやり取りは残っていますよ。渡辺武さんの文書などはだいたいそういうのが多いです。だから元気が出るわけではないでしょう。

○小池　不愉快な思いを残さないという気がしますね。

○伊藤　本当ですよ。本当にあの人に聞いておけば良かったというのが、たくさんあります。僕は渡辺武さんのインタビューも随分やりましたが、もうご高齢になってからだから、十分に思い出してもらえない。渡辺武さんの場合は、占領期の日記が残っているでしょう。それだけではちよつと物足りないと思って、渡辺武関係文書というのを随分出してもらった。今、また出してもらって、憲政（資料室）で整理していますが、やはりいいものがありますね。

今後の課題

○石田　これまで先生は、多くのオーラル・ヒストリーに関わってこられたと思いますが、その過程でいろいろな改良などを進められて、

今のかたちに来ていると思います。そのなかで、やり残した点や、ここはこうやりたいとか、そういう点がまだまだたくさんおありだと思えます。こうした点について、もう少しお話しただければと思うのですが。

○伊藤 いや、これは公文書であれ、私文書であれ、やはりみんながきちんと自分たちの記録を残そうという機運をつくらないことには、どうにもならないわけです。戦後、日本人はあれだけ頑張って高度成長をやって、今だって、その遺産で世界第三位のGNPです。これをどうやってつくったのか。みんなをやったのです。関わった人はものすごく多いはずなのに、その記録が残らない。これは本当に残念なことだと思えますね。あるいは、残っているのかもしれないけれども、発掘していない。

特に経営史の人などは、会社の統計資料ばかり使っているでしょう。経営史というのは、そういう分野ですね。僕らが言うような一次史料はほとんど使っていない。もう少し発掘史料で、僕は永野さんなんかも、これでもう少し頑張ってやろうと。

○小池 あれは政財界ですね。

○伊藤 ええ、そうです。永野一族はみんなそうですね、伍堂さんも含めて。

○石田 今のお話から言うと、やはりオーラルではなくて、いろいろな史料を残す中ということでしょうか。

○伊藤 両方ですね。だって、史料は残るけれども、オーラルは生きている人がいない限り駄目ですから。史料と違って、オーラルにメ

リットがあるのは、応答ができるということでしょう。史料は向こうから一方的に出てくるので、こちらでどうやって読むかというのは、いろいろなものを総合して読み込まなくては駄目です。だけど、インタビューの場合は、向こうが言っていることがおかしいとなったら、もう一度質問して、「本当ですか」「本当はこういうことではないですか」と。「うん」と言うかもしれないけれども、「うん」と言われていたのでは困るから、別の質問をしますけれども。

やはり日本社会の記録を残さないような体質を改善することが、史料を残す上においても、オーラルをやる上においても、絶対必要だと。オーラルの場合は、やはりあなたが言っているように、オーラルをアーカイブス自体がやる、あるいはアーカイブスがほかの人のやったデータを収集するというのをやるのは非常に大事だと思うのですね。

僕はオーラルをやっている人をいろいろ知っていますが、その記録をどうしたのか。どこかに入れたという話も聞かないし、たぶん自分でテープとして持っているでしょう。でも、そうだとしたら、遺族が捨てるかもしれないし、せっかくの音声が目になる。冊子などにはしないで、どんどん引用している人がたくさんいるわけです。何月何日のインタビューとか、反証の可能性がゼロなのです。では、自分が聞かなくてはいけないといっても、その時にはもう相手が死んでいるかもしれない。

○一同 ははは(笑)。

○伊藤 僕はインタビューをする人に、これはあなたの足跡を語ることだと。足跡は文章でも残りますし、音声でも残ります。そうやって、

みんなで記録を残していけないと、日本人がいったい何をしたのかという、こんにちまでの日本を築き上げるために何をしてきたのかということが明白ではなくなりますと。

そして、いろいろなことを外国と交渉したのも、もちろん外務省も記録は残していますが、外務省以外にもいろいろと交渉がある、そういうものの議事録が残っていないとすれば、向こうへ行つて向こうの文書を見ないと分からない。そうすると、向こうの文書は向こうの論理でできているから、向こうの論理で書かれたものをどうやって使うかというのは非常に難しいと思います。付き合わせて見る必要があるけれども、付き合わせる、こちらがない。だから、そういうときにはインタビューでもとつてあれば非常にいいわけですが。

明星大学が、戦後教育改革のオーラルをしたでしょう。あれは今、活字にしているのですか。

○石田 一部ですね。

○伊藤 確か、あそこの雑誌か何かにしてあるね。あれはいい仕事だと思えますが、継続性がないのが残念ですね。

○小池 あれはアメリカの人（ハリー・レイ）でしたね。

○伊藤 あれをやったのはそうです。だけど、日本人もたくさん聞いている。そのずっと延長線上に、僕らがやった木田さんとか、天城さんとか西田さんとかがあるでしょう。そこから先がないわけですね。だから、ある程度は国家的な事業として継続性が必要ですね。ところどころにぽつんぽつんとオーラルがあるというのは心細い。

でも、COEの時に、防衛庁もやったわけですね。海原（治）天皇か

ら始まって、ずっと歴代次官をやったわけでしょう。今度はそれを引き継いで、防研が今やっているわけです、相澤（淳）君たちが。これはずっと続くと思います。すごく良かったと思つて。あと、多少幾つかのところをやつていて、時々もらいますけれども。

○小池 これからのオーラル・ヒストリーというか、（御厨貴『オーラル・ヒストリー』を手に持ちながら）今こういう本が出ていて、オーラル・ヒストリーばかりといえますか。

○伊藤 はやりなのかね。

○石田 ピークは過ぎたように思いますね。

○小池 でも、たくさんまだ本が出ていますので。これからのオーラルというものを若い者に。

これに対する批判みたいところが僕はすごく強かったのですが。何か盲目的というか。どちらかというと、先生のオーラルは結構、即興の妙で話が広がっていくところに面白さがあつたのですが、こういうものが形式化されていくと、どうしても先ほど言った作り話とほぼ似たような、同じような話を蓄積していくだけということにもなりかねないというような気がしています。それは、先ほどの話を聞いていたら、質問者の問題ではあるのですが、先生は今後、オーラル・ヒストリーをもっと豊かなものにしていくといったときに、一番何が必要だと思いませんか。

○伊藤 何か特定の政治的な目的のためのオーラル・ヒストリーというのは論外ですが、やはりどうしても出てくると思うのですね。だから、きちんとしたオーラル・ヒストリーができる集団をつくっておか

ないといけないと思うのですが、そんな余裕がないわけですね。

確かに、この前COEでやった時は、オーラルができる集団をつくりましたよね。だから、今もこういうことをやっているわけでしょう。

あれは非常に良かったのではないかと思います。防研の人もそうでしょう。防衛官僚をやった時は、防衛研究所の中島信吾君も参加しています。彼があそこで立ち上げたのです。今、相澤君が引き継いでやっているでしょう。大蔵とか財務とか、経済産業省は、次官経験者を中心に伝統的にやっている。局長もやっているのかな、主要局長は。

僕は清家彰敏氏と一緒にやって、その時の記録を清家氏が矢野さんからもらって、僕はそれを全然見ていないで質問をやっているわけです。それで清家氏が言うには、「これは全然われわれがやっているほうが詳しいし、確かだ」と。三十何回もやっているから、それはそうですね。

とにかく財務と経産がやっているのですが、文科省は特にやっていないと思うし、ほかの省庁はどこだろうな。

○小池 そうですね、あとの省庁はないですね。

○伊藤 たぶんないでしょうね。でも、国土交通省のOBたちがインタビューをやっているのですね。なかなか面白いですよ、河川の改修問題とか、よく記録しています。だから、これもあれでしょう。「コクリートから人へ」か。今度きちんとした治水をやっていないかったところは、相当ひどい目に遭ったみたいですが。それは、やはりわれわれがこの国土を守るのだという、あの人たちには使命感がかなりあ

るわけです。だから読んでいて面白いですね。

大蔵とか財務の人たちは、この国は自分たちがつくっているのだという意識が強烈だから、通産はそれに対抗して、当然その使命感があつてやっているのだと思います。もう少し警察庁とか、そういうところがやってくれるといいですね。

○石田 あと農林水産がないですね。

○伊藤 農水はどうでしょうね。地下でやっているのかな。長い伝統のあるところですから。農林省はたくさん機関を持っていて、文書の集積などもやっているところがあるでしょう。あれは何だったかな。

○小池 何とか研究所ですか。

○伊藤 ええ。そういうところでやっていないのかな。何でも、今、財政の緊縮というようなことになると、アーカイブスとかが一番おろりを食っているのですね。アーカイブスでもオーラルなどは特に、そのまはすれだから、切られていくという。

○小池 本当に記録を残さない社会というのは変えないといけないですね。

○伊藤 まあ、そういうことですね。それで、せめて残った史料だけでも大事にしようというところですね。

○石田 何か湿っぽい話になってきましたね。

○一同 ははは(笑)。

○石田 景気のいい話になればいいのですが。

○伊藤 いや、景気よくはないですよ。

○石田 景気は悪いですからね。

○伊藤 ええ。これは第二次世界大戦の敗戦国のイタリアだって、ドイツだって、戦中期の文書を持っているのです。日本だけですよ、あんなに燃やしたのは。

○小池 燃やしたのはね。私物化したのでしょね。

○伊藤 私物化して私文書になっていけばいいですけども、そうではない。宮澤さんなどは、「自分が外務大臣の時の全史料だ」とか言って、金庫を一個くれたからね。運ぶのは大変だったけれども。

○石田 宮澤さんは、やはりいい意味でも悪い意味でもアメリカナイズされているので、記録を残す気持が強かったのではないですか。

○伊藤 そうですね。自分が三〇年ルールというのをつくったのだから。「今、二七年目で、あと二、三年でそうなるから君が持つていって大丈夫だ」と（笑）。

○石田 そんなことをおっしゃったのですか。

○伊藤 ええ。「いずれ小川平吉みたいにやるのでしょ」と言うから、「そうです」と。そういう前例があると非常に助かりますね。だから、永野さんでも、どこかに一人出してきてやっていいのです。

○小池 次から次へというかたちになると思うのですね。

○伊藤 だから、それを広島大学の文書館で取っても、僕はいいと思うのです。メリットになると思います。

○石田 では、本当にどうもありがとうございました。

（終了）

（いとう たかし・東京大学名誉教授）